正宗白鳥全集

第四卷

小説　四

福武書店

正宗白鳥全集第四巻

一九八四年十一月二十日　印刷
一九八四年十一月三十日　發行

著者　正宗白鳥
發行者　福武哲彦
發行所　株式会社　福武書店
東京都千代田區九段南二-二-二八
〒一〇二　電話（〇三）三三〇-二三二
振替口座（東京）六-一〇五〇九七

印刷・製本　大日本印刷株式會社
定價　六〇〇〇圓
第十五回配本（全三十巻）

（落丁・亂丁本はお取り換え致します）

©YUZÔ MASAMUNE 1984

《シリーズコード》ISBN 4-8288-2046-9
ISBN 4-8288 2135-X C0093
NDC918 216 540p

正宗白鳥全集　第四巻

監修　井伏鱒二
　　中村光夫
　　山本健吉
編集　紅野敏郎
　　中島河太郎
装丁　山高登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四卷　小說四　目次

お今　二
晝席　二七
心中未遂　三〇
隣の人　八一
ひとり言　八八
嵐　九四
電報　一五七
命知らず　一六四

小閑　一八一
老婆　一八七
まじなひ　一九六
不安　二〇五
半生を顧みて　二二三
旱魃　二六四
家出　二六九
諂諛の徒　二九五

惡女の囁　三〇〇
初　旅　三六九
默　闘　三七九
落伍者　四〇九
新方丈記　四一五
まぼろし　四二六
插　話　四五八
櫻咲く頃　四七七

隣同士　四八七
痩犬　四九七
夕凪　五〇二
解題　紅野敏郎　五三五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小說四

お今

秋雨は二階の窓に降りかゝつてゐる。黄ばんだ障子の破れ目から、薄ら寒い風が忍び込んでゐる。豆ランプは折々風にゆらめいた。今はランプの側に擦り寄つて、肥つた指先で小さい算盤を彈いては、口の中で何か云ひ〳〵、一心に考へ込んでゐたが、やがて、得心したやうに、顰めてゐた顔を和げて大息を吐いた。「あゝ寒い。」と、獨り言を云つて、ふと立つて、葛籠の中から袢纏を捜し出して、浴衣の上に重ねた。

そして、雨戸を締めて、豆ランプを消して、算盤を持つて、梯子段を下りた。階下の茶の間は瓦斯の光で明るかつた。鐵瓶から湯氣が吹き出て、煙草の臭い煙はお今の鼻を襲つた。今まで差向ひで深沈な話をしてゐた主婦と玩具屋の主人とは、梯子段の音を聞くと顔を上げて、微笑した。

「大變靜かだから、ゐないのかと思つてた。何をしてゐたんだい。」と、男の方が威勢のいゝ聲で云つた。

「ふゝん。」と云つて、お今はニヤ〳〵笑ひながら、主婦に算盤を返して、重さうな腰を卸した。だらしなく座つて、太い脛が浴衣の間から食み出るのも關はなかつた。

「また出してやがるな、汚い脛を。」と云ふと共に、男は煙管の雁首で、お今の脛を突いた。

「おゝ熱い。」と、お今は後退りして、慌て座り直して、「酷いことをするよ、この人は。」と、力を入れて睨んだ。

「熱かつたかい。お前さんの身體には燒火箸を當てたつて感じないだらうと思つたのに。」

「馬鹿におしでないよ。私だつて人間だよ。……ねえ主婦さん……主婦さんがあんまり柔しくするからいけないんだよ。時々はうんと虐めておやりよ。私が加勢して上げるから。」

「恐しくなつたね。」

男は首を縮めて、道化た顔をして、「謝つた〳〵。」と云つてゐたが、暫らくしてふと眞顔になつて、「さう云へばあの話はどうなつたね。西野の一件は。……」

「西野さん？」お今は目を見据ゑて、浮かりしてゐた心を引き締めて、「あの人にも弱つてしまふよ。どうしたらいいだらうね。先日出て行つたきり歸つて來ないんだつて。古賀さんはもう二三日待つとれ、大丈夫だからと云ふんだけど、私不安心で仕樣がないよ。」

「だから、おれは云はないこつちやない。……どうせもう取り返せる氣遣ひはないやな。本當にこれからは古賀なんかの口車に乘せられんやうに氣を付けなくちや駄目だぜ。……おれは親切でお前さんに云つて聞かせてるのに、些とも身を入れて聞かないから、そんな事になるんだ。」

男は眞面目でかう意見してゐるかと思ふと、俄かに冷かすやうな口を利いた。世界中の男の垢を付けて來てるんだから、お今さんの身體は臭い譯だよ。かうして側にゐると、妙な臭ひがするぜと、わざと小鼻を動かして嗅ぐ眞似をしたり、古賀さんはお前さんに一寸氣があるらしいから、あの人を取り持つてやらうか、いつそ二人で家を持つて、本式に高利貸でも始めちやどうだ。古賀さんの顏はどう見たつて、アイス面だから、屹度甘く行くに違ひないと云つて、主婦の同意を求めたりした。

「ねえ、姉さん。一つおれ達で媒介役を引き受けようぢやないか。」

「さうさね。」主婦は巫山戯た話に身を入れて相槌打つ氣持になれなくて、卒氣なく答へながら、振り返つて時計を見た。そして、「まだ早いのね。」と呟いて、意味ありげな目で男の方を見た。が、男がわざと氣の付かぬ風を裝つて、何時までも落着いてお今を揶揄つてゐるのを焦躁がつて、「お今さんにお留守番をして貰ひたいんだがね。いゝでせう。私達一寸買物に行つて來るから。」と、お今に向つて行つた。

「うゝ。」と承知しながら、お今は不審げに二人の顏を見比べて、「何の買物に行くの……遠方へ行くんかね。」

「ううん、さうでもないの。」

主婦は曖昧に言ひ濁して、手早く衣服を着替へて、先に立つて外へ出た。男も煙管を收めて、最早お今の大きな身體に目も呉れず、言葉一つ掛けないで、雨の中へ出て行つた。

お今は格子戸の間から、傘を並べて歩いてゐる二人の後ろ姿を見詰めて、その行先を想像してゐた。「高い室代を取つてる癖に、何時も人をお留守番にしちや、好きなことをしやがつて。」と忌々しく思はれて留守の間にどうかしてやらねば、埋め合せが付かないやうな氣がした。

雨の音は一層強くなつて、格子からも吹き込んだ。爺さんの薄い寢息が簞笥の蔭から聞えた。お今は家の中を見廻してゐたが、やがて、用簞笥や鼠入らずを開けて、用捨なく手を突込んで、中の者を取り出して見た。さして目を惹く者はなかつた。駄菓子や茹栗の喰ひ餘しが殘つてゐるばかりだつた。お今は後で氣取られぬやうに、一つ二つそつと抓んで頰張つたが、それだけでは物足らないので、飯櫃を出して、冷たい湯を掛けて、素飯を二三杯搔込んだ。

自分の懷を傷めないで、腹一杯に詰め込んだことは、お今にはこの上もなく悅しかつた。食器を元の通りにして、長火鉢の側に座つて、直ぐ前に投げ出されてゐる長煙管を何氣なく執つて、欲しくもない煙草を吸つた。只咽ぶばかりで味ひは更に覺えられない。苦い唾を吐き出して、袖口で唇を拭つた。

で、所在なくて、枕を引き寄せて手足を伸したが、ふと二階の物音が耳に付くと、矢庭に起き上つて、慌しく階子段を上つた。手索りにマツチを擦つて、豆ランプを點けて、周圍を顧みた。雨戸は堅く締つて、何處にも異狀はなかつた。天井に鼠が荒れ廻り、風が雨戸に音を立てゝゐるばかりであつた。

「まあ、よかつた。」と呟いて、柳行李を開けて、衣服の底から袱紗にしては馬鹿に大き過ぎる縮緬の風呂敷包を取り出した。中には新しい貯金帳と、丁寧に紙でくるんだ現金とがあつた。お今は薄い燈火の側で一々改めるのを樂みにした。今朝見た金高が少しも減つてゐないと思ふと悅しかつたが、その代り少しも增してゐないと思ふと物足らなかつた。

せめて日々の費用や月々の室代だけでも、誰れかゞ支拂つて呉れゝばいゝのだけれど、今の所そんな人はないし、自分で稼がなければ白銅一つ手に入りやしない。……お今は一念を凝らして五六年溜め込んだ財產の浮々してゐる中に磨り減らされるのを忍れては、ふと、また以前のやうな稼業に身を落さうといふ氣にもなつたが、かねて心に萌してゐる望みを思ひ出すと、自から躊躇された。

――津崎といふ昔の情夫に騙されて滿洲のある所へ身を賣つてから、運次第諸方を渡り歩いて、只小金を蓄へるのを樂みにして稼いでゐたのであるが、この朋輩の一人が日本へ歸るのを聞くと、自分も急に故鄕が懷しくなつて、逃げるやうに仕度して一緒に歸つて來た。朋輩は親の家へ歸つて、稼ぎ溜めた金で奇麗に暮すと云つて、亭主もちやんと決つてゐるらしい口吻だつた。金にのみ心を取られてゐたお今も、ふと羨ましくなつて、自分もその眞似をしたく

なつた。で、知り合ひの此處の主婦を手賴つて、打ち開けると、主婦は親切に聞いて呉れて、親身になつて身の振り方の相談相手になつてやらうなどと云つてゐたから、行き所のない身體をこの二階に置いてゐるのだが——。

お今はその大望の容易に達せられないのを焦躁がつてゐる中に、夏が過ぎて秋となつた。室代だつてお前さんの事だからおしいしだけでいゝなんて、主婦の口先で甘い事を云はれながら、もう餘程取り上げられた。たまに思ひ出したやうに、緣談の世話をしようと云ひ出すと、相手の男はどれも〳〵役に立たないのらくら者ばかり、お前さんと一緒になつたら、よく氣が合ふだらうよなんて。あの婆あ、人を馬鹿にしてゐる。——

お今は風呂敷包を元の通りに行李の中へ收めて、堅く蓋をした。そして、階下へ下りると、用箪笥を開けて、卷紙を出した。禿筆を不器用に握つて、覺束ない假名文字で、古賀宛の手紙を書いた。「西野さんの行衞を搜して、あのお金は至急返させるやうにして下さい。私も心配ですから。」と云ふ意味をやう〳〵の思ひで書き現した。

今夜玩具屋の旦那に脅された事を思ひ出すと、緣喜が惡い。「どうせ取り返さりやしない。」なんて。あれほど確かに受け合つて行つた古賀さんが、まさかそれなり打放つて置きやすまい。……が、若しもさうだつたら、生命懸けて取り返してやる。只の一錢だつて自分の身代に傷をつけてなるものか。生柔しい思ひで拵へたお金ぢやないんだもの。

お今は獨り考へ込んでゐればゐるほど、一刻も早く古賀に會つて樣子を知りたくなつた。手紙をやつて、悠長に先方の來るのを待つてはゐられないやうな氣がした。が、主婦は容易に歸つて來さうでないし、家を空けるのは不用心なので、暫らく迷つてゐたが、やがて思ひついて、寢息のしてゐる所へ行つた。

「お爺さん。」と、立ちながら二三度聲を掛けると、爺さんは驚いて目を開けて、頭を持上げた。

「お爺さんに急にお願ひがあるんだから、起きて下さいな。」

「どうかしたのかい。」爺さんは咳をしながら、だるさうに床の上に座つて、「お島はゐないんかい、どうした？」と、靜かな家の中をきよと〳〵見廻した。

「先き用足しに出て行つたの。……でね。私も急用が出來て、これから出掛けなきやならないの。お氣の毒だけど、お爺さん、お留守番をしてゐて下さいな。大急ぎで歸つて來ますから。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com